

# 第2章

## 緒論



# 1 乳幼児保育の基本

巷野悟郎

## 子育ての原点

少子高齢化の時代を迎えて家庭における子育て、育児に多くの問題が起こってきている。例えば生後3カ月頃になったとき、この頃は新生児の時期を過ぎて、子どもはよく泣くようになるが、これがどうして泣くのか分からないため、子どもに手を出してしまうことがあるという。子どもは言葉で言えないから、泣きで訴えるということが理解されていないのであろう。

「子育て」は私達の生活する身近なところで行われているから、誰でも自分が成人するまでに、ある程度の常識的なことが身についている。しかし今の時代は、それが必ずしも満たされていないために、自分が母親や父親になったとき、子どもを理解できない或いは気付かないために問題を起こしてしまっている。

私達の生活のなかで、代々の子育ての歴史は長い。親は子を育て、育った子は親になって子育ては代々続いている。しかし今の時代、子育てが分からない知らないという原因を考えたとき、考えられるのはいつの頃からか、身近な子育てが街の中から消えてきたと考えるほかない。少子高齢化もその一つであろう。

そこで今の時代、子育て支援を行うに当たっては、その背景にある時代の流れを理解しておくことが、その対策を考える一助となるであろう。

遡って昭和22年、終戦後の第一次ベビーブームで出生は260万人（現在は凡そ100万人）。しかし食物の欠乏や、伝染病の流行などで、1年間で乳児が20万人が死亡という時代のなかで、おとなも子どもも区別なく苦労の時代が続いた。

その頃の子どもが今60代・70代の祖父母の時代。昭和20年代・30年代は大変な時代だったが、それでも昭和30年代の終わり頃には、東京オリンピック、新幹線開通も経験している。

その後、昭和40年代は戦後の子ども達の青春時代。その頃の子育てでは「育児ノイローゼ」などの言葉も聞かれ、昭和48年は第二次ベビーブームで出生は209万人。

昭和50年代から世のなかは復興で、女性の就労、低年齢児保育も始まると同時に出生数は減少。住宅事情はよくなって、戸建・冷暖房も普及。核家族も増えて街の中から乳児の声が耳に入らなくなってきた。このような傾向は全国的で、今日に至っている。

その当時から背景として育った子ども達が現在の親になっており、育児相談の質問で多いのが、乳児の泣きなどである。

現代の祖父母が育った頃は、小さな子の泣き声は「それが赤ちゃん」とごく当たり前に受け止められていた。江戸時代からの「泣く子は育つ」が、なお受け継がれていたが、今は「どうして泣くのか」「家庭で飼っている犬や猫は、餌を出しておくで自分で食べるけれど、人の赤ちゃんはどうして自分でできないのか」という時代である。

子育て支援はその文字からは、親の子育てに手を貸すと受け取られがちだが、その前に「赤ちゃんとは」をよく理解してもらうことが先決で、これが理解されて始めて、古い時代の「泣く子は育つ」が分かって、子育てが楽しくなると考えていきたい。

## 子どもの成長と発達

私達は誰でも、今の自分というものの存在を知っているという自意識がある。そして今まで生きてきたこと、これからも毎日の生活をしながら将来を思い、健康に注意している。しかし今までを思い出したとき、かなり昔までたどることができるが、それでも子どもの頃のどこかで記憶が消えてしまっている。自分が「這い這い」をしていた頃のことなどは覚えていないし、母親のお腹の中にいた頃も知らない。

これを遡って考えてみると、私達は母親のお腹の子宮の中で育ち、あるときこの世に生まれてきて、育てられて、子どもの時代があつて、成人したということは確かである。

そこでこれを整理すると、私達には今に至るまでに三つの時期がある。

第1期→母の胎内で育ったこと

第2期→母の胎内から生まれて呼吸を始めて、自分というものを知らないままに、およそ3年間育てられていた

そして第3期→3歳頃から自分の存在を自覚し、時間・空間を理解して、昨日・今日・明日という流れのなかでの生活が始まり、今みんなと生活を共にして生きている

生まれてからの0・1・2歳という3年間の自分を私達は知らないが、その間に生きていくために必要な基本的な次の成長発達をしている。このことは確かである。

- 食と排泄の自立
- 二本足歩行など運動機能の発達
- 環境（昼夜・寒暑など）に適応のための自律神経の発達
- 言葉の発達

## 0・1・2歳児についての質問例

「動物は自分で食を運んで自分で食べるけれど、人の子はどうして自分で食べることができないのか。」という質問は多い。一人っ子や核家族で、小さい赤ちゃんと接する機会がないま

まに育った親からのようである。

人の子はそこまで発達しないままに生まれてくるので、自分に合ったものを選んで食べることができない。おとなが選んで食べさせてくれないければ、生きていけない。更に人は哺乳動物なので、母乳に始まって離乳食・幼児食と順を踏んで食の内容・味・量などをすすめていく。

それに対して子どもはなんでも口に入れてしまうので、食事の時は要注意。ことに誤飲による窒息に注意しなければならない。

そして食具としては簡単なスプーンが便利。日本の箸は正しく持たせたいけれど、0・1・2歳はまだ自分もわからないときだから、練習を始めるのは3歳過ぎて、話しが分かるようになってからにする。おけいこ事や勉強と同じ。

更に食に次いで、排泄のしつけはいつ頃からかという質問も多い。野生の動物はやたらな所で排泄しない。その臭いによって自分が襲われてしまうという本能であろう。人の子どもはそこまでできないうちに生まれてくるので、自分でできるまでは「おむつ」を当てて汚れないようにする。汚れたときは取り替えてあげる。1歳過ぎる頃になると尿意や便意を催したとき様子が変わるので、気付いたら便器でさせるなど手を貸しているうちに、2歳から3歳の頃には半数くらいの子が尿意や便意を教えるようになる。この頃から排泄の自立が始まる。成功したらほめてあげる。世界のなかには、おむつを当てないで様子を見ていて排泄を始末したり、陰部に筒をあてて排泄物を受け止めておく民族もある。

0・1・2歳は、子どもの「食と排泄」という、動物が生きるための基本的な機能が発達するとき。それはごく自然にすすんでいくことなので、あせらない、そして無理をしない。子どもの様子を見ながらときに手を貸していけば、段階を経て発達していく。そして多くの発達は、2歳・3歳頃の自由な行動のなかで、いつの間にか少しずつ目的に向かって自立していく。その頃少しでもできたら、その場でそのときほめてあげる。まだ何も分からないから、ほめたときの母の笑顔・明るい声そのとき出来たことを強く感じとって、だんだんできるようになる。始めはできない、成功しないことは当然なので、これを叱ったり、表情をかえたりすると、発達は停頓してしまう。

0・1・2歳児は「そのとき」「今」、ほめてあげるのがコツ。家族に云ってあげよう。

## 自律神経の働き

お腹の中で育っていたときの胎児の環境は一定だし、母体からは常時血管を通して栄養が補給されている。

生まれて母体から離れると、途端に変化するのが外気温で、時間の経過とともに空腹になると乳を飲む。飲んだ乳を消化し栄養として、やがて不要になった尿便を排泄する。夜が来て朝

になる明暗に対して、からだもそれにあわせて眠ったり目覚めたりのリズムにのせるようになる。

私達は誰でも1日24時間の明暗・寒暖・動と静・気象などに自分のからだの働きをのせていなければならない。その役割をするのが自律神経で、全身にはりめぐらされている。その自律神経は、からだの各部所の働きを調節している。

また自律神経には、全く反対の働きをする「交感神経」と「副交感神経」の2種類がある。

例えば昼と夜を考えると、一般に昼は生きるための食を獲得する。そのために人はからだを元気にするために血圧を上げて、血液を全身に循環させている。この働きをするのが交感神経。その反対に夜眠るときは血圧が下がった方が安静にできるので、心臓の働きを静かにする。この働きをするのが副交感神経で、交感神経と全く反対の働き。

この2つの自律神経は全く反対の働きをして、からだ全体を常にコントロールしている（表1より、場所によって或いは目的によって、二つの自律神経が夫々のどの役割を占めているかが分かる）。

表1 自律神経の働き

	交感神経	副交感神経
瞳孔	大きくなる	小さくなる
皮膚の血管	収縮する	拡張する
心臓の働き	活発になる	静かになる
気管支の太さ	拡張する	収縮する
気管支粘膜の分泌	少なくなる	多くなる
唾液の分泌	少なくなる	多くなる
胃腸の働き	緩慢になる	活発になる
膀胱の筋肉	弛緩	収縮
全体として 1日のなかで 環境 四季	活動的 昼間 寒いとき 冬	安定（蓄積） 夜間 暖かいとき 夏
年齢傾向	おとな	子ども

健康なからだ、抵抗力の強いからだというのは、環境の変化に対してからだは抵抗できる、或いは順応できるということである。その役割をしているのが自律神経である。

例えば寒いとすぐにかぜをひいてしまうというときは、からだは寒い、暑いに対して自律神経がうまく働いてくれないかもしれない。寒いときはからだから熱が逃げないように皮膚を走っている血管を収縮させてからだを守る。暑いときは反対に血管を太くして汗をかき、熱

を放散させてからだを守る。このように自律神経がそのときどきに合わせて働かないと、からだの調子をおかしくしてしまうことになる。

強いからだをつくるために、からだはいつも相反する2つの自律神経が、そのときの状態に合わせてうまく働いてくれるようにするのがよい。一般におとなと子どもを比較すると、子どもは副交感神経の働きの傾向だから、よく眠りよく食べて、消化吸収が盛ん。小さい頃にしっかりしたからだを準備するためにこのような仕組みになっている。しかしいつまでもこの傾向では困るので、交感神経の出番を多くするために、衣類での調節がある。

そこで生まれてしばらくは、からだの体温を保つために、1枚余計に着せて外気温度から守ることになるが、3カ月頃になったら着せ過ぎに注意という程度。半年頃になったらからだの働きも活発で、乳から離乳食へと食事が変わるので、体温の産生が多くなるから、日中などはむしろ大人より1枚少な目くらいで、動きを活発にする。それによって交感神経の出番が多くなって、抵抗力がつく。

この頃からの着せ方は、着せるか着せないか?、「迷ったときは着せない」が正解とする要領で、普段の厚着には注意するとよい。

一般に子どもの頃は副交感神経優位で、成人は交感神経優位。その交差は3歳頃と目標をたてて、日常生活での着せ方に気をくばるようにする。

## 楽しい子育て

乳児をお腹に宿した妊婦は、かなり早い時期から様子が違ってきている。それは早くから母親を感じているからであろう。ときにお腹に声かけをしているけれど、胎児の聴覚は早くから発達しているので、母子の会話が始まっているのであろう。

子どもは何も分からないようだが、お腹の中から聞きなれていた声は生まれてからは増幅されるから、親と子は益々身近になる。殊に乳を飲んで満足のとき、おむつを取り替えて気持ちがいいとき、抱っこされて寝付くときなど、母親の声の重なりは、乳児の世界を満足させて体重を増やしていくことであろう。親子の集まりにいるとき、わが子を静かに抱っこしているだけの母親がいる。もったいない。声かけするように話してあげよう。母親の声が大好きなのである。それが乳児の育つ力になっていく。

## 不慮の事故

生まれたばかりの乳児は何もできないが、間もなく手に触れた物を握って口にもっていったり、どこでも寝返りをしたり、やがて小さな足で立ちあがって歩く。その頃になると何にでも興味をもつから、やりたい放題。

しかし0・1・2歳の子どものは自覚がないから、興味があれば何でもやっている。危ないこ

とを知らない。危険がそこにあっても先を読めないから、突き進んだだけでも満足する。そこに危険がある。そして「不慮の事故」である。

乳児はいつもそのような行動で一段ずつ発達していくが、そこには常に試行があるから、そばにいるおとなは事故に遭遇することがあるだろうことを理解して、いつも子どもの行動から目を離すことはできない。転倒・打撲・転落・怪我・誤飲などはいつも子どもの行動につきまわっている。それから守りながら、子どもの行動を安全に導く大人の知恵が必要である。子どもを事故から避けながら行動することができれば、その結果はいつも発達の階段を上がっているのである。

そのように廻りから手をかけて導いてあげるのを、日本では「育児・子育て」と表現しているが、英語圏では未熟な子どもを守る或いは注意するということが先で、それを「ケア」と表現し、その結果が子の「育ち」ということで、英語圏のケアは日本の育児、子育てと視点が違うのである。子どもの発達を子育てで捉えるか、子どもの危険をケアしてその結果の子の「育ち」ととらえるかである。

0・1・2歳児はすべてが自分中心でやりたい放題だから、事故、怪我には注意しなければならないが、あまりに行動を制限されたり、過剰な注意は行動力を弱めてしまう。

3歳近くなると、何となく落ち着いて、話すと分かるようになる。そのような様子が見えてくると、やがて脳の発達も成人に近づいてくるので、順序を待ったり昨日・明日が分かるから、おとなの世界に一歩足を踏み入れた段階になる。そして自分から事故を避けたりする様子がみられるようになり、みんなと遊ぶことができるようになる。集団の生活に加わっていく第一歩である。

## 2 「あるがまま」を認めあい、「あこがれ」を見出し、「あてにされる」関係を 生み出す—地域社会の中に多世代交流を創り出す拠点としての「子育て支 援センター」の役割—

増山 均

### はじめに—アンケート結果を見て気になること

地域社会の崩壊、核家族化の進行の中で、〈子育て〉という営みが家庭の中に閉じ込められ、いつの間にか、子育ては親の役割であり、とりわけ母親の役割であるかのごとき認識が広まり、「母子一体化」「母子カプセル化」が指摘されている。地域社会における人間関係が希薄化していく現代社会のなかで、子育てにとって不可欠な、多様な人間関係の中で親子ともども人間として練り上げられていく、〈子育ての社会化〉のプロセスが失われている。

そうした時だからこそ、「子育て支援センター」には、家庭の子育てを外に向かって開くきっかけをうみだしていく役割を期待したい。地域に暮らす人々との生活や共同作業を通しての交わりなど、人間関係を多様化・重層化するなかで、学び合い・頼りあい・支えあう関係をひろげたい。

〈子育て支援〉にとって大切な視点として、そうした人間関係の多様化・重層化のなかで生み出される3つのキーワード（「あるがまま」・「あこがれ」・「あてにする」）に注目する。それは、子どもたちが生き生きと活動し、その主体性を発揮し、社会的な主体として育っていくために重要な視点だからである。

今回の調査結果を見て、特に「今後の課題」（本書52ページ図29参照）を見て、①「児童期・青少年期も視野に入れた子育て支援をしていく」「乳幼児だけでなく、学童期に継続する支援をしていく」、②「地域の高齢者や子どもの祖父母と交流し、一緒に活動する」、③「保育所やセンターが中心となった地域のコミュニティーづくり」という課題の重要性の把握が弱いことが気になった。

先の3つのキーワードを手がかりにしながら、今後の課題として、これらの項目への注目度を高める必要があることについて提言したい。

### 1. 〈あるがまま〉への注目

#### ● 「あるがまま」の姿を受け止める難しさ

一人ひとりの子どもが成長していくときに、「あるがまま」の姿を受け止められるということ、認められるということは最も重要な土台である。子どもたちの成長は、自尊感情と自己肯定感を必要とする。自分自身を取り巻いている人間関係の中で、親や周りの大人から愛され、

支えられ、認められているという実感の中で、自尊感情と自己肯定感が育まれる。

一人ひとりの子どもの「あるがまま」の姿を受け止める第一の大人は、何よりもまず両親でありたい。しかし、わが子を「一人前に育てる」「しっかりとした大人に育てる」という課題を担っている親にとって、頭では分かっているが、なかなかわが子の「あるがまま」を認められない。それは、わが子には、生活習慣を身につけ、さらに生きていくために必要な知識や技術、コミュニケーションの力、社会的なモラルを身につけ、少しでも成長・発達して行ってほしいと願い、いつまでもわが子が「あるがまま」の姿でいられたのでは困るからである。「子どもを『育てる』」という営みは、「『あるがまま』を認める」という課題と矛盾しやすく、子育てをする親だからこそ、子育ての責任を果たそうとするがゆえに、わが子の「あるがまま」の姿を認めにくいという難しさが付きまとう。

そこで、「子育て」をする親の近くにおいて、子どもの「あるがまま」を認め、「あるがまま」の姿を受け止めてくれる人がいてくれると心強い。子どもたちの「あるがまま」の姿を受け止めやすい大人として、高齢者世代の役割に期待したいのである。

#### ●子育てにおける高齢者の役割—「子ども」は「高齢者」とつながり学んで「大人」になる

孫を持つ年代になってみると体験的に分かることだが、祖父母世代と孫世代は本能的に相互に惹かれ合うものがある。中には、親の子育てに干渉する祖父母も現れているが、子育ての責任が重くのしかかる親と子の関係とは違い、お互いに「あるがままの存在」を認め合える関係にあるからである。働き盛りの親世代と違って、定年退職後の祖父母世代と生産労働に従事していない子ども世代は、ともに社会的な時間に拘束されない自由な時間を共有しており、両者の生活のテンポと感情の波長を合わせ、ゆったりと共に生活を楽しみ合いながら、ぬくもりある人間関係の内実を生み出す可能性があるからである。

民俗学が教えるところによれば、「子ども」と「高齢者」の関係は、本来一続きのものであり、少なくとも前近代の地域共同体や大家族においては「子ども」も「高齢者」も存在価値のある位置を占め、その関係は相互に畏怖され励ましを与え、生命連鎖の中で循環する関係であったと言う。

新しい少子高齢社会のビジョンを、「老人のケア」と「子どものケア」を結合することの中に見出した広井良典は、「人間の三世代モデル」についての理論的検討を行い、子どもと高齢者の関係の再構築の中に人間的特性を見出している（『「老人と子ども」統合ケア』中央法規、2000年）。

生物学的視点から見て、ヒト（人間）のみが生殖を終えた後の長い「後生殖期」をもっている。広井は、「後生殖期」すなわち「高齢期」の登場にこそ人間という生き物の独自の意味があり、「高齢化社会」とは『「後生殖期」が普遍化した社会』だと言う。「人間本来が持つポテ

ンシャルが真に実現される社会」であり「生命史の到達点」とでもいえるような積極的意味を持った社会と捉え直す。人間という生き物の本質は、「老人」「大人」「子ども」という三世代構造を持っていること、特に「子ども」と「老人」がかかわるということの中に、人間を人間たらしめる要素があるというのである。両者のかかわりの要素とは、「遊」と「学」を特徴とする「子ども」に対して、「老人」は「遊」と「教」を特徴とし、そこに両者の対関係（「遊」を共にしながら、老人が教え子どもが学ぶ）の根拠を見いだしている。

東京おもちゃ美術館館長の多田千尋は、その著書『遊びが育てる世代間交流』（黎明書房、2002年）の中で、沖縄には「ファーカンダ」という方言があることを紹介している。この言葉は、〈夫婦〉〈親子〉〈兄弟〉と同じように、「孫」と「祖父母」との密接な関係をセットでとらえる呼称である。家族と地域の間関係の絆が薄くなり「子ども」と「高齢者」が切り離されている今、日常生活の中で「あるがまま」を認めあえる「ファーカンダ」の関係をとり戻したいものである。

## 2. 〈あこがれ〉への注目

### ● 「あこがれ」をひろげる年長児童・青少年・若者の存在と魅力

人間関係づくりの中で、次に注目したいのは、発達段階の上の年代との交流である。乳幼児期の子どもと児童期の子どもの交流、児童期の子どもと青少年期の子どもとの交流、さらに子どもたちが高校生や大学生・若者とともに遊び・学び・交流する機会をつくりたい。同年齢の子ども同士の交流だけでなく、発達の先の段階にいる年代との交流は、子どもたちの中に「あこがれ」の対象を生み出す。

子どもが育つのは、親や大人によって「育てられる」からではない。子どもは、外からの力によって育てられるのではなく、自分自身の中に、目標を取り込み、発達課題を取り込むことによって、その目標に近づいていきたい、そのようになりたいという願いと意欲に導かれ自ら育っていく。

子どもたちは、教科書やマニュアルによって育てられていくのではない。自分の生活の中で、近くにいる人の中に「生きた人間の教科書」を見出すことによって、その人に「あこがれ」を感じ、近づいていきたい、一緒にいたい、そのようになりたいと強く願うことによって育っていく。

保育所や学童保育の取り組みの中でよく見られることだが、年少の子どもたちは年長の子どもたちの中に「あこがれる存在」を見出す。保育所に、中学生や高校生のお兄さんお姉さんが来て一緒に遊ぶと、子どもたちの活力が増し活性化する。子どもの放課後活動や子ども会活動に大学生や若者が加わると、子どもたちの興味・関心・意欲が引き出される。それは、子どもたちにとって学生や若者は「親しみやすい先輩」であり、気持ちの分かるお兄さん・お姉さん

だからである。親や大人とは違って、また子育ての専門家としての保育士とも違って、彼らは未完成の手本、すぐ手が届きそうな手本であり、その姿に明日の自分を見ることのできる「生きた手本」だからである。ヴィゴツキーの言葉を借りれば、年長児や若者は年少の子どもの「発達最近接領域」（『思考と言語』1934年）に発達目標を持ち込む存在といえる。

年長者の中に、「あこがれ」を見出し、目標を自分の中に取り込むことにより、子どもたちは育っていく。年長者と子どもとのかかわりを〈子ども－若者〉関係として総称すれば、子どもの「ありのまま」を受け止める〈子ども－高齢者〉の関係とともに、「あこがれ」を生み出す人間関係として発達の次のステージにいる年長者との出会い・ふれあいは、子育てにとって不可欠である。〈子育て〉の中に、子どもたち同士が育ち合う〈子育て〉の軸を位置づけるための必要な視点として〈子ども－若者〉関係に注目しておきたい。

### ●発達における「戻りの階段」への注目を

〈子ども－若者〉関係は、年下の子どもたちにとってのみ意味があることなのだろうか。

年下の子どもとかかわることが、同時に年長の子どもたちにとって、どういう意義があるかを考えてみたい。

一般に、子どもの成長発達を考える場合、乳幼児期から児童期へ、児童期から青少年期へ、青少年期から若者期へというように、加齢とともに発達段階を次のステージへと昇っていくこととしてイメージすることが一般的である。しかしそれでは、「登りの階段」しか見ていないことになる。

大学生や若者が子どもたちに接すること、高校生や中学生が、保育所に行って幼児と一緒に遊ぶこと、乳幼児に触れ合うことによって、自分が育ってきた過去を振り返る機会も重要ではないか。やんちゃで元気な子どもたちとの触れ合いは、時にわがままで聞き分けのない子どもたちに振り回され、追いかけられ、じゃれつかれ、もみくちゃにされるが、はじけるような子どものエネルギーを受け取る。昔読んだ絵本やおもちゃに再び出会い、昔遊んだ園庭や遊具に触れたとき、懐かしさとともに自分の今をみつめ直す。

一人前の市民、社会人への自立へと、さらに階段を昇ることが期待されている毎日の中で、時には発達段階の下のステージの子どもたちと触れ合い、自分が育ってきた道筋を振り返ることも必要である。子どもの成長・自立に向けて、発達における「戻りの階段」を用意することも必要ではないだろうか。

〈子ども－若者〉関係の重要性は、子育て真っ最中の親にとっては、子どもから若者まで年齢を超えた年代が交流する姿を通して、わが子が育ち行く明日の姿を想像することができる重要な機会でもある。

「少し見ぬ うちに天晴 若竹ぞ」竹の生長のスピードの速さになぞらえた小林一茶の俳句

のように、子どもの育ちはきわめて早い。この間まで保育所に通っていた乳幼児、小学校に通っていた子どもたちが、いつの間にか声変わりし、親の背丈を超えていく。

子育ては、子どもの今を見つめているだけでは不十分である。乳幼児の今を見つめながらも、子どもが育ち行く次のステージを見通すことが必要である。子育て支援は、子育ての今を支援するだけでなく、子どもが育ち行く先への見通しを持てるように援助することが求められる。子育て支援において、〈子ども－若者〉関係に注目することは、子どもにとっても親にとっても、大きな意味がある。

### 3. 〈あてにする—あてにされる〉関係への注目

#### ● 「あてにされる」関係の創造—出番と役割と立場をつくる

人間の生きがいにとって重要な要素は、日々の人間関係の中で「あてにされる」ということである。「あてにされる」ということは、子どもの育ちにとっても重要な要素である。

人間関係の中で、「あてにされる」ということは、そこに自分の役割と出番があり、自分の立場があるということであり、立場に付随した責任があるということである。どんなに小さくとも、人間は「役割」を持ち、「出番」が与えられ、「責任」を果たすことにより、「立場」を獲得し成長していく。家庭でも、学校でも、職場でも、地域社会でも、「あてにする—あてにされる」という関係のなかで、自尊感情も、憧れも強まっていく。

今日の〈子育て支援〉で問題なのは、子どもたちは守られ、サービスを与えられる存在ではあっても、「あてにされる」存在でなくなったということである。子どもの生活のなかに役割と出番が失われ、家庭と地域社会の中で「子どもたちは失業している」のである。

かつて第1次産業を基礎として村共同体が機能していた時代は、家事労働・生産労働の中に、村の祭りや伝統芸能の中に、さまざまな形で子どもたちの役割と出番が組み込まれていた。家庭を超えた地域社会の中に、他に変えがたい役割と出番があり、子どもたちは地域の大人たちから「あてにされる」存在だったのである。

幼い時から、役割を果たす年長の子を見てまねをし、始めは小さな役割から、次第に少しずつ大きな役割を獲得し、それをやり遂げていくことを通じて、子どもたちは共同体の一員として成長していった。そこは「状況に埋め込まれた学習」(J. レイヴ、E. ウェンガー) の場だったのである。いまなぜ地域コミュニティーづくりが必要なのかといえば、地域社会の中に子どもたちにも役割と出番がある人間関係を編み直し、子どもたちの知恵と力を「あてにする」関係を生み出すためである。

出番と役割と立場の獲得、「あてにし—あてにされる」関係の創造は、子どものみならず親自身にとっても必要なことである。子育てを家庭内に閉ざさずに、地域社会に向かって開いていくためには、親自身が地域コミュニティーの中で立場を獲得することが求められる。

〈子育て支援〉は、子育ての負担を軽くするために子育てのメニューを提供する〈子育てのサービス化〉ではなく、地域コミュニティーの多面的・重層的な人間関係の中で、頼りあい・支えあい・学び合う関係をひろげ、親子ともども〈立場・役割・出番を獲得していく社会化〉実現のためのプロセス支援でありたい。